

五、足元にある心の修正の場

(ページ『反省の日々』参照)

私は反省する中で、「先ず自分が変わらなくてはいけない。それじゃ、変わるとい
う事はどういう事かな？」と、考えてみたが分からない。

分からないということは、自分の心を外に向けていたということですね。だから気
が付かない訳です。棚に上げてしまいうんですね。自分は気が付かないで、人の事ばっ

かりですね。

「ちよつと待てよ、これは違うぞ、それじゃ、なんだろうな？」と、考えていったら、
そうしたら、朝起きてから寝るまでの間のやっている事の中に、全部あるんですよ。

「先ず、家の中では何が悪いのかな？」と考えた。

自分が家に帰って来て、現実に女房にやらせている事で、自分がやれば、お互い
に心が乱れずに、時間もまた掛からずに、幾らでも出来る事があるんですね。それが
出来なかつたら、絶対に他の事は出来ないということなんです。難しい事じゃない。
ところが、みんな知っていてもやらない。「あー、今日やろう」、「明日やろう」、「い
や、明後日やろう」になっってくるんですね。

例えば、ここに物があるとする。自分はその近くにいる、

「おーい」

「おとうさん、なぐに？」

「おい、それ取ってくれ」

——もう一寸、こうやれば(手を伸ばす)届くの、近くで「取ってくれ」とやる。

女房は茶碗を一所懸命に洗ってますね。そうしたら手を拭きながら来ますね。

「わたしは茶碗を洗っているのに、何でもっと手を伸ばして取らないの？」とカッカしてきますよね。

そうすると今度は、待っている方は、「何やってんだ、まだか」とイライラしてきますね。(笑) それを自分でやれば、何にもないんですよ。

まあ、一つの例を挙げますと、こういう事なんです。

それで私は、そういうような自分で出来る事を黙って始めていった訳です。

そういう中で、私は女房に、

「私も今までやりたい事やっていたけど、これは私が間違っていた。

高橋先生の話を聴いたら、間違っていた事に気が付いた。先生の教えは、とっても素晴らしい、本も素晴らしいんだよ。おまえも、この本は善いから読んで見るよ」

——女房は一切手を触れませんでしたね。もうこっちはイライラしてきますよね、

「善い本なのに、何で読まないんだ」って——。(笑)

そうすると、ちゃんともう分かっていますよね、波動が伝わって行きますから、

「おとうさんね、あなたは素晴らしい本だと思ってるかもしれないけれどもね、ところで、あなたは今まで、一体どんな事をやってきたの？」

——言われたらもう何にも言えない。(笑) すみませんが、何の言葉も出てこない。

それからは、高橋先生の名前も、本の事も、一切言わなかったんですよ。

唯ひたすら、自分が毎日それをやろうと、やっている。

もう苦しいですよ、「おーい、それ取ってくれ」と呼びそうになって我慢したり、呼んでしまったりと、何回も繰り返し繰り返しやって、もう厭だなど思っても、「あー、やろうやろう」と自分に言い聞かせてやる。

そして、それから何年かした時に、実は女房が高橋先生の本を全部読んでいた訳です。私はそれまで気が付かなかったんですよ……。

ですから私のやってる事を分かっていますよ。女房の方が偉いですよねえ。(笑)

一九八二年十一月